日本醫史學雜誌

第14巻　第4号

昭和43年12月31日発行

原　著

緒方洪庵墓の整理……緒方　富雄…(1)

鷗外の史伝〔渋江抽斉〕の校勘記(1)……松木　明…(5)

〔甲状腺〕の語史学的考察 ……松木　明知…(9)

石川大浪筆ヒポクラテス象の蘭文書き入れ……片桐　一男…(15)

例会記事……(18)

雑　報……(25)

通巻第1374号

日本医史学会

東京都文京区本郷2～1～1
順天堂大学医学部医史学教授室内
振替口座・東京15250番

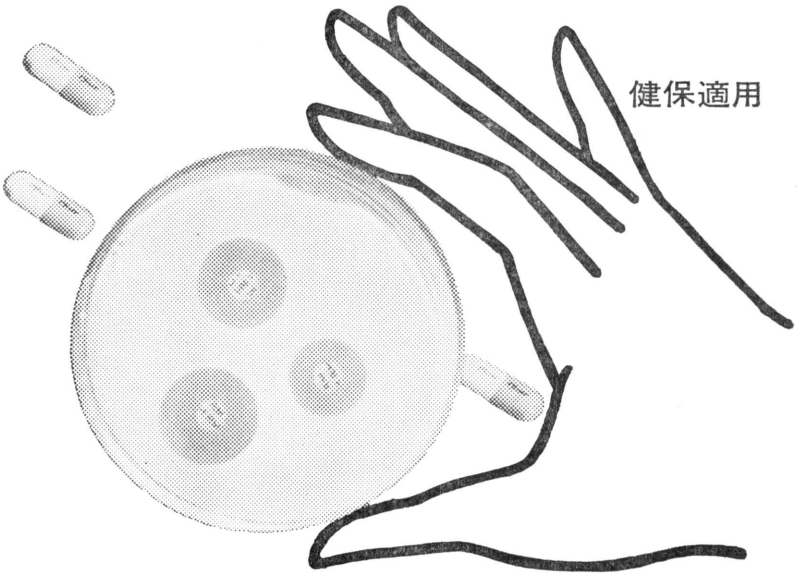
1日600mgの時代です！

従来のテトラサイクリンに広さと深みが加わりました

広範囲抗生物質　Methacycline hydrochloride

ロンドマイシン カプセル

- 呼吸器感染症，消化器感染症などに優れた治療効果が得られる
- 1日600mg2分服で有効，吸収が速かで高血中濃度が長時間持続する
- 胃腸障害が少なく，光線過敏症も報告されていない
- 健保薬価：1カプセル　￥57.00



＊科学は世界の向上のために―医学は人間の幸せのために

Pfizer　台糖ファイザー株式会社

東京都中央区日本橋通2の2　TEL（272）6661

RM－6

緒方洪庵墓の整理

The Rearrangement of Koan Ogata's Tomb.

緒方富雄

Tomio Ogata

東京駒込の高林寺（文京区向丘二丁目三十七番五号）にある緒方洪庵（一八一〇―一八六三）の墓は、もと約百メートル西南の地点にあって、大正十三年二月五日（一九二四）に東京府の史蹟に指定されていた。ところが昭和十一年（一九三六）になって、寺の前の道路が拡張されることになり、墓の場所にかかるというので、同年六月二十二日に現在の位置に移転したのである（文献一）。

あたらしい墓所は、面積がせまく、形もちがうので、墓石や贈位記念碑（追賁碑）をもとのように配置することができなかった。すなわち追賁碑は、もと洪庵夫妻の墓石の列の背後の中間にあつて、二つの墓石のあいだから見える位置にたてられてあったが、移転後は、その余地がないため、洪庵夫妻の墓石にむかって右の手前に、これと直角の位置にすえ、また緒方重三郎（洪庵の末子）と緒方洪三（十カ月で没。おそらく重三郎の子）との墓がもとの墓所内の右ワキにはなれてたっていたのを、右奥の隅にすえた。

ところが、この配置では、墓に近づくとき、かならずまず高い追賁碑の背面が見えるので、親族のあいだで、この位置をかえる考えが起った。最近になってその機運が熟し、重三郎、洪三の二基の墓石をとりはらって、その場所へ追賁碑を移すことにした。重三郎の子孫はなく、家は絶えているので、墓誌の拓本をとり、写真をとって、これを保存し、墓石はこれまでの追賁碑の位置の地下に埋め、必要なときはほりおこせるようにした。

これまでは地面が露出していたのを、この機会に御影石の敷石と大粒の伊勢玉とを敷きつめ、すきまをセメントで固めた。また背後に石柱をおぎない、鉄棒をとおして、形をととのえた。

工事は今年（昭和四十三年）六月十日の洪庵忌の前日に完成した。（写真1）。

このたび、洪庵の略歴を墓歴とをしるしたものをスエーデン産赤御影の板に彫り、洪庵夫人の墓にむかって左手前の地面に低くすえた。設計はわたくしである。この板の冒頭に彫った緒方洪庵の自署は、洪庵が万延元年十月（一八六〇）大阪尼崎町に除痘館ができた日に書いた除痘館記録の最後の署名を拡大したものである（写真2参照）文は下段のとおりである。

追賁碑は、明治四十二年六月八日（一九〇九）に洪庵に従四位が贈位されたのを記念して、明治四十五年七月（一九一二）にたてられたもので、撰は森林太郎、書は日下部東作鳴鶴である（文献二、三）。

なお洪庵、洪庵夫人の墓誌、追賁碑の碑文は、すべてわたくしの「緒方洪庵」（文献四）にのっている。

緒方洪庵（自署拡大）

緒方洪庵　医学者　蘭学者　教育者
奥医師　法眼　医学所頭取

文化七年七月十四日（一八一〇）備中足守に生る
天保九年（一八三八）より文久二年（一八六二）まで
大阪に適々斎塾を開く
文久三年六月十日（一八六三）江戸にて没五十四才
花陰院殿前法眼公裁文粛大居士
文久三年六月十二日（一八六三）高林寺に埋葬
明治四十五年七月十日（一九一二）追賁碑建立
大正十三年二月五日（一九二四）東京府史蹟指定
昭和十一年六月二十二日（一九三六）
道路拡張のため現在位置へ移転
昭和四十三年六月十日（一九六八）
追賁碑移転整備

写真 1　整備した洪庵墓所

写真 2　あたらしくすえた洪庵略歴と墓歴

文献

一　緒方富雄「緒方洪庵墓の移転」中外医事新報　第一二三九号　昭和十二年一月、緒方富雄「蘭学のころ」弘文社　昭和十九年再録

二　緒方富雄「緒方洪庵の贈位とその前後」日本医史学雑誌　第一四巻　第二号　昭和四十三年七月

三　緒方富雄「緒方洪庵贈位記念碑の建設とその前後」　日本医事新報　第一四巻第二号　昭和四十三年七月

四　緒方富雄「緒方洪庵伝」岩波書店　昭和三十八年三月

鷗外の史伝【渋江抽斎】の校勘記（一）

A Note on Ogai's "Tyusai Shibue"

松木明

Akira Matsuki M. D.
Hirosaki, Aomori, Japan

鷗外の名高い史伝に、「渋江抽斎」がある。江戸末期の弘前藩の定府の医官渋江抽斎の伝記で、抽斎一代の事跡はもとよりその子孫に至るまで、人と時代とをほぼ編年的に精細に描出したものである。

「渋江抽斎」が発表されたのは大正五年で、その年の一月三日から五月七日まで約四ケ月にわたって、東京日日、大阪毎日の両新聞に連載された。

当時私は中学へ入学したばかりの頃で、新聞紙上に連載された抽斎の記事については、全く知るところがなかった。私がはじめて「渋江抽斎」を知ったのは弘前高等学校の三年の時で、大正十二年五月のことであった。鷗外の全集が刊行されてその時に配本になった第七巻史伝の中に、「渋江抽斎」が収載されていたのである。

「渋江抽斎」は史実にもとずく精緻な実証的論述であり、しかも幕末から明治大正へと時運変遷の跡を叙してあますところなく、まことに興味津々として一読巻を掩う能わざらしめるものがあった。中でも維新当時江戸定府の引き揚げに伴い舞台はにわかに弘前に移り、しかもその場所は私たちの住居の周辺であり、その登場人物はいずれも私たちの日常接する人たちばかりであったので、非常に近親感を覚え感銘がことに深かった。

言うまでもなく弘前は津軽の城下街ではあるが、北奥辺

陬の地であるため弘前の街や津軽の風俗などが著名な文芸作品の中に描写されるなどということはほとんどなく、それまでには田山花袋の小説「生」の中に古めかしい弘前の城下街の風物がその珍奇な言葉とともに、わずかに描写されているにすぎなかった。しかしこれとても一般的の描写で特定の場所や人物についての具体的な記載は全然みられなかった。「渋江抽斎」ではもちろん抽斎やその系族については全く知るところがなかったが、弘前での人物たとえば矢川一族や中村一族など私たちが熟知の人物が多く、またその場所も富田新町北新寺町白銀町などすべて私たちの周囲の日常来往する土地であった。

○

翌大正十三年四月に私は東京大学医学部へ入学した。関東大震災の翌年である。

その年の九月には永井荷風の「麻布襍記」が春陽堂から刊行された。荷風の作品についてはすでに「あめりか物語」や「ふらんす物語」その他の作品に親しんで、その独特の自然描写や文明批評などに深く傾倒していたので、早速一本を求めてこれを繙いた。

「麻布襍記」は荷風が居を麻布に遷してから五年の間に発表した小説随筆の類を集めて一冊としたもので、この中に抽斎の次子優善が遊蕩無頼の生涯と荷風自らの性行とを比較した「梅雨晴」の一篇や、「渋江抽斎」に関する荷風の詳細な論評などがあった。荷風の「麻布襍記」の中に渋江抽斎に関する記事があろうとは全く思いもよらなかった。そしてさきに読んだ「渋江抽斎」を想起しながら、荷風の凱切な論評に深い感動を覚えた。

大学を卒業してからは血清化学の研究に従事し一般の興味もまた自ら自然科学や生物学の方面に移ったために、「渋江抽斎」についてはいつとはなしに忘れてしまっていた。

○

昭和十五年八月になって「渋江抽斎」が岩波文庫で刊行された。「渋江抽斎」が単行本になったのはこれがはじめである。それで約二十年振りで「渋江抽斎」を再読する機会に恵まれたのであった。

抽斎は江戸定府の医官であるところからその交遊諸家にも医家が多く、北岡大惇、小野元秀、佐々木元俊など「渋江抽斎」の中に登場する弘前藩の著名な医家もまた少くなかった。したがって「渋江抽斎」は実に津軽の医史への緒口で

あり津軽の医史の研究は「渋江抽斎」を一つの拠点として展開されるべきではなかろうかと考えた。

ちょうどその頃は診療のかたわら、津軽地方人の血清人類学的研究を企図していたので時間的にもほとん余裕がなかったが、漸く最近になってその研究も一応終了したので、かねてから関心をもっていた「渋江抽斎」の考察に着手し改め　「渋江抽斎」を読み返してみたのである。

○

ところが意外にも「渋江抽斎」の中に十数個所の誤謬があることがわかった。全集（昭和二十六年岩波版）の巻末にある校勘記に於いて誤謬や脱漏補遺などについて詳しい記載があるので、よもや誤謬などがあろうとは全く思いがけなかった。

これらの誤謬は嗣子保やその他の報道者が鷗外に呈出した資料に於いてすでに誤謬があり、鷗外がその資料をそのまま採用記載したためによるものもあるが、その大半は鷗外自身の考え違い書き違いと見られるものである。

全集に採録された「渋江抽斎」は掲載当時の新聞の切抜きについて、鷗外自身が加筆訂正したものを底本として採用したというのであるから、このような誤謬はその訂正の際に見出されたことと思われる。しかし現在なお全集にそのまま誤謬が記載されているところからすれば、鷗外自身も気がつかずに看過したものと見える。

全く白璧の微瑕とでも言うべきものであろう。しかし真実を尊ぶ歴史や伝記に於いては一字の誤謬一事の矛盾もその影響するところが非常に多大なものがあり、いかなる瑣末な事柄でもそのまま看過すべきではない。ことに科学的に精細に描出された「渋江抽斎」に於いてはなお然りとする。これらの誤謬は是非とも註記もしくは解説に於いて訂正されるべきものと思う。

左にこれらの誤謬を記載しこれに簡単な説明を加える。

1

「中にも外崎氏の名を指した人は郷土の事に精しい佐藤弥六さんと云ふ老人で、当時大正四年に七十七歳になると云ってあった」

（その四　一〇四頁）

佐藤弥六は天保十三年の生れで大正十二年に八十二歳の高令で死去したので、大正四年には七十四歳である。したがって七十七歳とあるのは七十四歳と訂正註記すべきであ

る。

佐藤弥六は弘前藩士で弘前藩の蘭医佐々木元俊に蘭学を学び、後江戸に出て福沢諭吉の英学塾で学んだ。明治五年帰郷親方町で西洋小間物の店を開いた。また津軽の郷土史に精しく著書に「津軽しるべ」や「陸奥評林」などがある。

鷗外に佐藤弥六のことを報じたのは当時弘前の衛戍病院長をしていた二等軍医正柏村保ではないかと思われる。「渋江抽斎」にも「そのうち弘前に勤めてゐる同僚の書状が数通届いた」（その四　一〇四頁）とあり、大正四年八月十四日の日記にも「柏村保に書を遺る」とある。抽斎のことを柏村保に問い合わせたのであろう。

（未完）

（医師　弘前市在住）

Summary

A life history of Chusai Shibue (1805～1858) who had been a famous physician of Tsugaru feudal clan, was logically and cogently written by Ogai Mori in 1916.

But there are seventeen mistakes in it, many of which would be probably caused be Ogai's misconception In this article they have been corrected and brief commentaries have been added respectively

【甲状腺】の語史学的考察

弘前大学医学部麻酔科　松木明知

An etymological study on the thyroid gland "Kojo-sen"

Akitomo Matsuki, M.D.
Dept. of Anesthesiology
School of Medicine, Hirosaki Univ., Japan

1　緒言
2　「甲状腺」の語史学的考察
(1)　「解体新書」以前の解剖書と甲状腺
(2)　「解体新書」と甲状腺
(3)　「重訂解体新書」と甲状腺
(4)　「医範提綱」と甲状腺
(5)　明治期の解剖書に現われた甲状腺
3　結語
註

1　緒言

内分泌器官の一つである「甲状腺」について、その語がいつ頃からだれによって用いられたかは興味のある問題である。

人体解剖名彙の語史については、すでに大鳥博士[1]が総説的な研究を発表しているが、各々の器官や組織の名彙についての語史学的研究は少ない。

内分泌の概念は中国の医学においてはほとんど考慮されず、西欧[2][3]においてもその概念が具体的に形成され始めたのは漸く十七世紀に入ってからのことであった。

本稿では内分泌器官の一つである甲状腺について語史学的考察を加えるが、これは単に一解剖名彙の命名の歴史に止まらず、日本における解剖学の発達の一面を示すものと言うべきであろう。

2　「甲状腺」の語史学的考察

(1)　「解体新書」以前の解剖書と甲状腺

ほかの諸分野におけると同じように、医学の分野においても、日本は中国の影響を蒙ることが甚大であった。影響というよりもむしろ中国の医学をそのまま移入受容しその伝統を墨守した。

もっとも鎌倉、室町、江戸と時代が下るにしたがって中国伝来の医学はわが国独自の発展を遂げたとはいうものの、解剖学の中で最も基礎となる解剖名彙については中国のそれをそのまま踏襲して使用したのであった。

いわゆる五臓六腑説で代表される中国の古典医学では、内分泌器官については全く認識がなく、したがってその伝統を継承したわが国においても何ら考慮が払われることがなかった。

「解体新書」の中で杉田玄白らが「漢人所未説者」と記載した[4]「膵臓」とは異なり、内分泌器官の中でも比較的体表近くに存し、またしばしば遭遇する甲状腺腫の際には触知可能な甲状腺についてさえ、何ら記載が見られないのは右に述べた理由に基づくものと考えられる。

西欧の近世解剖学の移入紹介、つまり具体的には「解体新書」の飜訳によってはじめてわが国の医師は「甲状腺」の存在を知ったのである。

山脇東洋の「臓志」[5]（宝暦九年、一七五九）はわが国で公刊された最初の人体解剖書であるが、中国医学の影響を強く受けており、大小腸の区別さえ明記しておらず、甲状腺の記載が見られないのもまた当然のことであろう。

これに次いで上梓された河口信任の「解屍編」[2]（明和九年、一七七二）の中でも「甲状腺」の記載はない。

東洋の解剖実施に倣ってこれを行うものが輩出した。伊良子光顕（宝暦八年、一七五八）、栗山孝庵（宝暦八、九年、一七五八、九）、平壺賀甲叔（明和二年、一七六五）、半井彦、山室知将（明和六年、一七六九）、らの事蹟が今に伝わっているが、彼等の解剖の目的が主として胸腹部臓器の観察にあったためか、甲状腺にまでは注意が払われてなかった。

長崎のオランダ通辞である本木良意によって、レムメリ

ンの解剖書が「和蘭全軀内外分合図」[5]として飜訳されたのは遅くとも元禄十年（一六九六）以前であるとされているが、刊行されたのはそれより後の明和九年（一七七二）であった。わが国における西洋解剖書飜訳の嚆矢として近年とくに注目されるようになった。しかしこの中には甲状腺について何等の記載もみられなかった。レムメリンの原本に接し得ないので確かなことはわからないが、あるいは原本に甲状腺の記載がなかったとも考えられる。

いずれにせよ杉田玄白、前野良沢、中川淳庵らがクルムスの解剖書を飜訳するまではわが国の医者は甲状腺の存在を全く知らなかったものといえよう。

(2) 「解体新書」と甲状腺

明和八年（一七七一）三月四日、江戸骨ケ原（小塚ケ原）で行なわれた腑分けは杉田玄白らをしてクルムスの「ターヘル・アナトミア」を記述せしめた直接の動機であり「解体新書」[6]の日本文化史に及ぼした影響は計り知れないものがある。

この間の事情は玄白の回想記「蘭東事始」[7]（一名蘭学事始）で広く知られている。

本書の飜訳によって玄白らはそれまでの中国医学には存在しなかった組織や器官の知識を得た。

神経、大機里爾（膵臓）、門脈、奇縷管（胸管）は「漢人未ダ説カズ」と記した主なものであるが、甲状腺もこの中に数えられるべきである。

「解体新書」巻二の「肺篇第十四」には甲状腺について次のように言及して「甲様機里爾」と呼称したことが知られる。

> 気管之後面者三襲也。一者薄膜、二者薄肉、三者小機里爾横簇。其上両側有機里爾之大者著焉。即名甲様機里爾。

これと同じように現在の「甲状軟骨」は「甲様軟骨」としてある。

「機里爾」はオランダ語の Klier[8] で「腺」を意味しており、「大機里爾」といえば「膵臓」を指していた。これに相当する語がなかったの発音通りにしておいたのであった。なお「解体新書」の図版には甲状腺の記載はない。

「解体新書」の公刊に先立つこと一年半の安永二年（一七七三）正月に玄白らは新書の内容を要約した「解体約図」[5][9]

を作製して世に問うた。

一は「解体新書」の広告的役割を果たし、他は蘭書の飜訳出版に対する幕府の意向を打診する意図を有していた。

序説、臓腑、脈絡、骨節、解説の五枚から成っているが、第三枚の臓腑の項では従来の中国医学では知られなかったものとして「大機里児（膵臓）」「門脈」「奇縷管（胸管）」の三つを挙げているが甲状腺については記載は全く見られなかった。

(3) 「重訂解体新書」と甲状腺

大槻玄沢は師の玄白から「解体新書」の誤謬を訂し、これを一層完璧なものとするよう命を受けた。

約十年後の寛政十年（一七九八）には既に完成していたようであるが[10]「重訂解体新書」として上梓されたのは漸く文政九年（一八二六）になってからであった。

十四冊の大部から成りこれに中伊三郎の描写にかかる解剖図一冊が含まれている。

その「巻三」の「胸篇第十四」には甲状腺について「甲状沪胞　在　其両側上部　是沪胞大者」とある。「其」とは気管のことを指している。

すなわち「解体新書」で「機里爾」と音訳されたが、玄沢はこれを「沪胞」と意訳し、さらに「甲様」を「甲状」と改めた。つまり「甲様機里爾」が「甲状沪胞」となったのである。

同じく「甲様軟骨」は「甲状軟骨」に改められた。

(4) 「医範提綱」と甲状腺

文化二年（一八〇五）玄沢の弟子宇田川玄真は「和蘭内景医範提綱」を公刊した。

本書は日本医学史上に重要な意義を有しており、小川博士[11]によれば「平易な文章を以って西洋解剖学の精粋を説き、生理学及び疾病の原因にまで及び当時の医家を裨益する所が多大であったことである」とされている。

「医範提綱」の普及した他の理由として、前述の「重訂解体新書」のように大部でなく僅か三冊と手頃であり、さらにまた用語が平易であったためであろう。

「膵」の字を製ったのも玄真である。本書の用語は今日の解剖書のそれと余り大差がない程である。

題言に「此書ニ載ル諸器諸液ノ名称並ニ新装字等皆重訂解体新書ト参考出入シテ改訳シ医範提綱ニ載ル所ナリ、故ニ其名義ハ医範ニ就テ考フベシ、斯ニ其改正スルモノヲ挙ケ原訳ノ解体新書ト異同アルヲ示シ検索ニ便ナラシム」と

記して「霊液(神経液)」以下六十八の新名称を挙げている。この中でとくに新しく「膵」と「腺」の二字を製ったことが特筆される。

これによって「解体新書」の「甲様」が「重訂解体新書」「医範提綱」の「甲状」となり、また「解体新書」の「機里爾」が「重訂解体新書」で「沪胞」と意訳されさらに、「医範提綱」において「腺」と改訳され、はじめて現在われわれが使用している「甲状腺」の語彙が完成したのである。

(5) 明治期の解剖書に現われた甲状腺

江戸時代の人体解剖のほとんどすべてが刑場で行なわれ、しかも十分に時間をかけ観察出来なかったことが解剖学の発達を障害した大きな原因であった。

このことは種痘所の頭取大槻俊斎に対する幕府の回答によっても十分窺われる。[11] すなわち刑場以外の場所での死体解剖は許可されなかったのである。

しかし維新後明治政府は逆に刑屍を大学東校に送ってその研究を助成した。

解剖用の死体の有無が斯界の発達進歩に果たす役割りは測り知れないものがあり、一方解剖が盛んに行なわれるようになると参考書の需要が高まり諸外国の解剖書が続々と飜訳出版された。

中欽哉の「布列私解剖図譜(明治五年、一八七二)」[5] 松村矩明の「虞列伊氏解剖訓蒙(明治五年、一八七二)」[5]「解剖摘要」(明治九年、一八七六)」などがその代表的なものであるが、いずれも「甲状腺」の語を使用している。このことは「甲状腺」が訳語として広く普及していたことを示すものであろう。

3 結語

本稿では西洋の近代解剖学がわが国に紹介されるに伴い、当時の医師達がそれまで全く知らなかった甲状腺の存在に気付き、これに「甲様機里爾」「甲状沪胞」などの名称を与えたが、文化二年(一八〇五)宇田川玄真が「甲状腺」の訳語を提唱して以来、この語が現在に至るまで広く使用されるに至った経緯を述べた。

したがって「甲状腺」の語は約一六〇年の歴史を有していることになる。

註

(1) 大鳥蘭三郎　我医学に使用せらるる解剖学語彙の変遷(一

〜五）中外医事新報，第一一八九〜一一九三号，昭和七年十一月〜八年三月
(2) Singer, C., and Underwood E. A ; A short history of medicine, Oxford, 1962.
(3) Garrison, F. H.; An introduction to the history of medicine, Saunders 1912.
(4) 松本明知 「膵臓」の語史学的考察 未発表
(5) 東京大学図書館蔵
(6) 筆者蔵
(7) 松村明校注 「蘭東事始」日本古典文学大系九五 岩波書店 昭和三九年十月
(8) 斉藤静 日本語に及ぼしたオランダ語の影響 篠崎書店 昭和四二年八月
(9) 緒方富雄編 解体約図（複製版）医学書院 昭和四十年七月
(10) 筆者蔵
(11) 小川鼎三 明治前日本解剖学史 明治前日本医学史 第一巻所収 日本学術振興会 一九五五年四月

Summary

There has been no descsription of endocrine organs in the Chinese classical anatomy, therefore none of physicians in Japan under the marked influence of Chinese medicine had no concept of endocrine organs for a long time, up to the latter half of the 18th century.

It was 1770's when a group of Japanese physicians Genpaku Sugita, Junan Nakagawa etc. pioneered in introducing western medicine to Japan, and they were the first in obtaining the knowledge of pancreas, thyroid gland and thoracic duct through Kulmus' "Tabulae anatomicae", though they knew at that time neither their functions nor their names.

In 1805 the thyroid gland was named "Kojo-sen" for the first time by Genshin Udagawa. "Kojo" means thyroid and "sen" means gland. This has become standard since then.

石川大浪筆ヒポクラテス像の蘭文書き入れ

片桐一男

On the Caption on the Portrait of Hippocrates by Tairo Ishikawa.

Kazuo Katagiri

本誌の第一三巻第一号に吉川康雄博士の珍蔵にかかる吉川宗元に宛てた、前野良沢の書状と石川大浪の画筆になるヒポクラテス像を紹介した。

右のうちヒポクラテス像に記されている蘭文書き入れを翻字掲載して、若干の考察を加えてみたのであったが、書き入れの筆が擦れて不鮮明であるのに加えて、筆者撮影の写真が不出来であったため重要な点で誤読を犯していたことに気付いた。緒方富雄博士の指摘とお勧めをいただいてもいたので、ここに本誌の余白を借りて補訂の一文を掲げ、責任を果たしたく思う。

この右向きの水墨画ヒポクラテス像の下に不鮮明な筆蹟で蘭文の書き入れがあり、改めて次の如く読みとれる。

HIPPOCRATES COUS.

In Grieken Land.

Getekent in quanseij 11, door. I : K : Tairou

これに拙訳を施してみれば次の通りである

ヒポクラテス　コウス

ギリシヤの地における

寛政11年に画かれた，石川大浪によって

HIPPOCRATES COËS.
In Gricken Land.

となろうかと思う。したがって、本図は寛政十一年（一七九九）に江戸の洋画家石川大浪がヒポクラテスの像を摸写して、蘭文で画題と製作年を書き、署名したものであることがわかる。画像・蘭文ともに石川大浪の筆にあるものである。石川大浪はこのヒポクラテス像をば、前稿でも述べたように、交際のあったと思われる大垣藩医にして前野良沢の門人で「五液論」の翻訳業績をもち寛政十年の蘭学者相撲番附で東方前頭二枚目の高位を与えられた吉川宗元に贈った一幅と考えられるところである。石川大浪ならびに吉川宗元についての関係史料も前稿発表以後若干蒐集できて興味のある点もあるが、それらは一切他日に譲って本論文では前稿の補訂の責任を果たすにとどめたい。

ちなみに本図は筆者が遇目したヒポクラテス像のうちでは最も作製年代の早いものであって、これと同系統の右向きヒポクラテスには天保十年（一八三九）宇田川榕庵自筆のヒポクラテス銅版画と、安政三年（一八五六）古河の枚田水石の筆になるヒポクラテス像などがある。

【附記】再度、現物について調査の便を与えられた吉川康雄博士ならびに有益な助言をいただいた緒方富雄博士に謝意を申し述べたい。一九六八、一〇、二〇稿

Summary

The portrait by Tairo Ishikawa is the first portrait of Hippocrates in Japan. The short caption on the portrait can be read as follows :

HIPPOCRATES COÜS
In Grieken Land
Getekent in Q'uangseij 11, door I : K : Tairou.

日本医史学会例会記事

九月例会　九月二十八日（土）
於慶応大学医学部北里記念医学図書館二階会議室

一　近代医家の位地

羽倉　敬尚

二、日本医史学会の沿革について

小川鼎三・酒井シヅ

調査の動機は本会の総会が昭和四四年度は第七〇回と称せられるが、その根拠如何ということである。この回数は私立奨進医会が明治二五年三月四日に開いた第一回先哲祭から始まる。この会は第二回からは医家先哲追薦会とよばれて、毎年一回三月四日に開かれた。富士川游がこの会の主動者であった。明治二七年の末に田口和美が私立奨進医会の会長となって以来、その没する（明治三七年二月）まで先哲追薦会の内容がかなり整っていたことが注目される。

第一九回（明治四三年三月三〇日）は京都帝大内で行われ、初めて東京以外で、また三月四日でなくなされた。第三回日本医学会総会が京都で開かれたためである。第三〇回（大正一〇年）のときが小塚原腑分百五十年目に当るので、観臓記念碑をつくり回向院内に建てることがきまり翌年完成した。

「日本医史学会」の創立が協議されたのは昭和二年一一月で、その時、中外医事新報が日本医史学会の機関紙となったと思われる。昭和一一年に第四五回医家先哲追薦会と日本医師協会創立二〇周年を記念して式典が行われ、その時配布された医家先哲追薦会の記録によると第三七回医家先哲追薦会（昭和三）のとき従来の奨進医会はその医史および道義部門が日本医史学会となり、医制および経済部門が日本医師協会となった。これより医家先哲追薦会は日本医史学会の主催にて行うこととなったとある。日本医史学会の理事長は初代呉秀三、二代（昭和七年より）入沢達吉、三代（昭和一三年末より）富士川游である。

昭和九年第九回日本医学会総会のとき日本医史学会はその第一分科会となり、初めて一般より演題を募集した講演会を行っている。昭和一六年に「中外医事新報」は「日本医史学雑誌」と改称された。そのとき理事長は第四代の藤浪剛一であり、ついで昭和一七年の末に山崎佐が第五代の理事長となり、第二次大戦と戦後の混乱に学会の運営も困難をきわめた。

戦後は昭和二三年三月四日順天堂医大産院の講堂で第五七回医家先哲追薦会が開かれているが、昭和一九年の第五三回医家先哲追薦会を最後にその間の記録はなく、次いで昭和二九年三月二八日の日本医史学会総会が第五六回と称せられているので、昭和二三年に開催されたものが第五五回であったかその点に問題が残されている。第五六回総会以後、毎年一回づつ総会が開かれて今日に及んでいる。ただし、昭和三四年の日本医学会総会のとき医史学会はシンポジウムにだけ参加したので、この年は日本医史学会総会は開かれていない。一方、昭和二九年以前も昭和二二年、二六年の医学会総会の開かれた時には第一分科会として日本医史学会総会は開かれている。理事長は昭和二八年七月から第六代の内山孝一、昭和三五年四月から第七代の小川鼎三である。

十月例会　十月二十六日（土）
於慶応義塾大学医学部北里記念医学図書館第一会議室

一　ナイチンゲールと日本

日生病院　長門谷　洋治

Florence Nightingale（1820—1910 以下ナと略）は近代看護学の確立者として知られ、わが国への影響も大である。その紹介は来日外人により行なわれたものと、日本人がむこうで得てきたものによるのとがある。ここではそれらのうち直接ナに会ったと思われるものに限ってみてみたい。まず看護関係でのもっとも初期の来日者である M. E. Reed（来日、1884）や、Agnes Vetch（1884）はナ看護学校の卒業生（ただし、ナは病身のため直接教檀に立つことはなかった）であるとされ、有名な Linda Richards（1886）はナに会つた（1877）経験を有している。

日本人関係者として高木兼寛（1849—1920）は1875—80、セントトーマス病院医学校に留学しているが、この間ナに会ったという確証はない。

しかし、彼が 1884 わが国最初の看護婦養成所を創るにいたったさいのナの感化は大きい。

石黒忠悳（1849—1941）は1887、カルルスルーエにおける第四回赤十字国際会議に出席。

その帰途ナに会ったが、これについて彼は多くを述べていない。佐伯理一郎(1862—1953)は1889—90在英。この間にナを訪い、サイン帳に自分の名を記してきたという。津田梅子（1864—1929）は滞英中の1899，3，20に彼女を訪い、当日の印象を詳しく日記に記している。安井てつ（1870—1945）も同じ1899に津田の紹介で彼女に会っている。小沢武雄（1844—1926）は日赤副社長としてロンドンの赤十字会議に出席、このとき彼女を訪ねたが、すでに人事不省であったという。

死前年の1909には日赤病院看護婦監督、萩原たけ子（1873—1936）が万国看護婦大会出席のさい、彼女に面会希望したが、もちろん話をきき得る状態ではなかった。ナは1910，8，13死亡するが、日本の一般新聞、医学総合雑誌はきそってその死をいたみ、彼女の功績をたたえた。同年9，27東京の日赤病院では「故ナイチンゲール嬢追弔会」を開き、その席上石黒忠悳は〃ナイチンゲール石黒記念牌〃の制定を発表した。

わが国では今日まで、ほぼ十三種、十七冊におよぶ単行本による彼女の伝記がでているが、本格的にとりくんだものは意外に少なく、

この面での研究はなお今後に残されているといってよいであろう。

二　日本における医聖崇拝

緒方　富雄

漢方医学では、ふるくから神農を医祖として崇拝し、その画像あるいは彫像を祭っていた。西洋医学を修めた日本の医学者たちも、はじめ家業として、ある程度漢方医学を知っていたから、西洋医学にも神農にあたる医祖または医聖をさがして、ヒポクラテスを見出した。

ヒポクラテスの略伝は、前野良沢が一七七〇年に、杉田玄白が、一七七一年に入手し、一七七一年江戸千住骨ケ原で刑死体を見て、解体新書翻訳の動機となったターヘルアナトミアの脚註に出ていたが、それが蘭学者に活用されるようになったのは、二十年も後

のことである。

ヒポクラテスの伝を本格的に書いたのは大槻玄沢がはじめである（一七九九）。また玄沢は同年石川大浪に蘭書「可鹿（または児）涅乙吉」に掲げられた画像を描かせ、そのうえにヒポクラテス伝を書いた。これは逸して伝わっていないが、同類の画像が現存している。この伝と画像とが、日本における最初のものである。

ヒポクラテスを礼賛した詩文の現存するものでもおそらく四十を越えるから、いかにヒポクラテスが崇拝されたかがわかる。

ヒポクラテスの画像をえがいた人としては、石川大浪、桂川甫賢、渡辺華山が注目される。いずれも外人の原画を模したものであるが、画の系統は数種ある。題言には、蘭文と漢文のものがある。ターヘルアナトミアの脚註をそのまま書いたものがすくなくないが、吉雄権之助、吉雄忠次郎、辻蘭室の蘭文は異色がある。桂川甫賢の題言は数種あって注目に価する。坪井信道の医聖礼賛の詩は自筆のもの三種以上のほか信道の門人緒方洪庵、さらに洪庵の門人長与専斎も書いている。（研究は続行中で、これまでにわかった主なものを供覧した。）

十一月例会　（歯学史集談会と合同開催）

十一月三十日（土）

於日本大学歯学部大学院会議室

一　中国における水銀利尿剤の濫觴と神仙流医学

大塚　恭男

不老不死への願望が、中国古来の自然崇拝、原始宗教としての巫の信仰、呪術等と融合一体となって方術が成立したのは戦国時代の末頃といわれる。こうして生まれた神仙家は武帝の儒教尊重政策のため、淮南王劉安のもとに結集して、淮南子の所謂中篇八巻、別名鴻宝万畢が成立した。鴻宝万畢の断簡中に「朱砂為澒」の句があることは、硫化水銀が加熱されて水銀に変ずる事実が、この時代に既に知られていたことを示す。

周礼の「凡療瘍以五毒攻之」の鄭玄注には丹砂を含む五種の薬物を用いて、瘍の治療を行ったことを記しており、水銀剤を純医学的目的で使用した最も初期の記録と云えよう。

陶弘景の編した校訂神農本草経では丹砂の別録部分の記載として「通血脈止煩満消渇」とあるのは、水銀剤の利尿効果を表現したものと解釈することができる。但し右の事実がいつ頃発見されたかは知るよしがない。

葛洪の肘後備急方の陶弘景追補部分とみなされる処方に、「胡洽水銀丸」とよばれるものがある。これは葶藶、椒目、芒硝、水銀の四味よりなり「大治水腫、利小便」を目標としている。方中の「姚同」の語は、集験方の著者姚僧垣（四九五―五八〇）も同一方を記しているという事実をさすと思われる。

千金要方にも類似の一方を記しているが、これは、水銀、葶藶、椒目、衣魚、水萍、瓜帯、滑石、芒硝の八味からなる。但し注として「深氏集験陶氏古今録験無衣魚水萍瓜帯滑石」と記している。

外台秘要は古今録験より葶藶、椒目、芒硝、水銀よりなる処方を引き、古今録験の注（甄権注）として「出胡洽」と記し、又後注（王燾注）として釈僧深の別方にふれ、更に文仲、陶氏、集験、范汪等も同様の処方を記していることを述べている。

演者はこれらの資料に対する考察を試み近く原著に詳細に論ずる如く、胡洽（西暦五世紀頃の人）をもって、現存資料よりたどり得る最古の水銀利尿剤開発者に擬せんとするものである。

二　藤井方亭の生家をたづねて

藤井　亨巳

今回機会あって多年の宿題としていた藤井方亭の生家（勢州野田村）の探索に踏みきった。予て連絡を得ていた日本医史学会の会員であり三重県の郷土史家茅原弘氏の御助力により野田の藤井家発見に成功した次第である。

勢州野田村とは、今日の三重県安芸郡豊里村字野田であって、藤井家はこの地に住む事大約二百五十年、現当主藤井新太郎氏に至っている、この計画により、凡そ百二三十年ぶりで藤井両家の再会が実現した事はまことに感概無量であった。

言うまでもなく、藤井方亭の資料は稀少と言わる、従ってその真相は誤り多く明白を欠いている、そこで同家に方亭の解説に役立つ未見資料が死蔵されているとひそかに推定し、その発見により、方亭研究に一層の拍車をかけたい事を願った。

昭和四十三年六月十四日、茅原氏と同道同家を再度訪問数種の未見資料文書を写真に収めた、それらの文書中特筆すべき方亭の新資料があり、この計画は大きな成果をもたらしたと思う。その新資料とは何にか、方亭の父藤井周朔と宇田川玄真との間に交された往復文書（文化六年）で、之れによると明に方亭は玄真の養子となっている。方亭は宇田川玄真の後継に内定していたとは当藤井家の伝承であるが、此の度、右文書を見て、その伝承の誤らざる事を確認した。そして、私の日頃主張する玄真と方亭との深い関係が実証された。しかし、この養子関係は解消し周知の通り玄真は文化八年江沢榕と養子縁組した、何れにしても、この調べは方亭の真相研究に大に参考となろう。

三　わが国における初期歯科医師団体の成立並びにその発展過程の展望

高木圭二郎

明治新政府は一八六八年西洋医術採用を宣言し、一八七四年医制を発布して、近代的医療制度の確立を目指し、翌七五年からは医師の試験制度を実施した。当時、歯科医師という法令上の身分制度はなく、医師の中の産科、眼科、整骨科と並んで口中科という専門医としての取扱いとなっていた。一八七九年医師試験規則が制定されたが、口中科が歯科という名称に変っただけであって、歯科医療担当者の基本的身分は依然として医師の中にあった。

一八八三年医術開業試験規則が制定された際、その規則の内容は、医術開業試験と歯科医術開業試験の二本立となり、法令上は医師免許規則により医師、歯科医師という区別はなく、すべて医師であったが、主体的に歯科医業を主たる業務とする者が分離していった。

現在でいう Physician specialized stomatology という形のものといえよう。しかし、他面、実質的に医師に対する概念の歯科医師として成長しつつあったことも事実である。

一八九〇年当時、歯科医術開業試験に合格した新進の歯科医療担当者は全国に二〇〇名足らずであり、約四万名の一般医師と従来家と称する約八〇〇名の入歯歯抜口中療治営業者との谷間にあって、世間的には従来家との区別が明かでなく社会的地位も低くみられ、一方、膨大な医師の中にあっては、特別の一小専門集団として遊離し勝ちであったようである。このような客観情勢は、試験合格の歯科医療担当者（以下「歯科医師」と假称する）をして団結し、その業権の確立と確保とを図らねばならぬ状態へと追い込

んでいった。そして、ついに全国の四分の一である五〇余名の歯科医師の在住する東京において、一八九三年「歯科医会」という名の団体が東京を中心とする歯科医師によって結成された。これがわが国の歯科医師団体の濫觴とする。

その後、各医師団体より医師法案が相ついで発表、または議会に提出され、歯科医師団体としては、どのような態度をとるべきか、悩み多い時代を経て、一九〇三年約七〇〇名に増加した歯科医師は、全国的歯科医師団体である大日本歯科医会を結成し、医師法と並列する歯科医師法の制定へ向ってそのエネルギーを結集していく。その過程は、次の表のとおりである。

医師会、歯科医師会成立過程の概要

	医師会	歯科医師会
一八八六	東京医会結成（三月）	
一八九〇	帝国医会結成（四月）	
一八九三	大日本医会結成（四月）	
一八九六	（東京医会、医士法案起草）	
一八九七	（大日本医会、医士法案を議会に提出するも審議未了）	
一八九八	（東京医会、医師会法案を議会に提出、否決）	
一八九九	明治医会結成（二月）	
	（明治医会、医師法案発表）	
一九〇一	関西連合医会結成（四月）	
一九〇二	（関西連合医会、医師法案発表）	歯科医会設立（七月）
一九〇三	帝国連合医会結成（三月）	歯科医会、日本歯科医会と改称
一九〇四	（帝国連合医会、医師法案発表）	
一九〇六	医師法、歯科医師法、医師会規則	
一九〇七		大日本歯科医師大会（四月、大阪）
一九一四	日本連合医師会結成	大日本歯科医会設立（十一月）
		（大日本歯科医会、歯科医師法草案決定）
		歯科医師会規則等制定
		大日本歯科医会、日本連合歯科医会と改称

十二月例会　（蘭学資料研究会と合同開催）十二月二十一日（土）
於慶応義塾大学北里記念医学図書館第一会議室

一　司馬江漢の銅版画技法の原典について

菅野　陽

腐食銅版画を日本で始めて創ったのは司馬江漢であり、それは天明三年九月（一七八三）のことであった。江漢は「西洋画談」「和蘭通舶」の両著で「ボイス」に記載されている銅版画製作技法を大槻玄沢の訳によって知り、日本で始めて作った事を述べている。しかし同じ時代に森島中良、松平定信はそれぞれの著書で「ショメル」に同様の技法の項のあることを述べているが、その項は後に「厚生新編」に訳述された。以上によって江漢が拠った辞典については諸説がある。そこで銅版画製作に必要な腐食法、彫刻法の製版項目と印刷の項目を両辞典についてそれぞれ比較検討した。

その結果両辞典の特色、実作に対する有効性が明かとなった。即ち「ボイス」は彫刻法に重点をおき、「ショメル」は腐食法に重点があり、当時の新しい技法を詳細に述べている。また実際の製作の手引きとしては前者は簡略に過ぎて殆ど役に立たず、後者の方が遙かに有効である。

江漢が製作案内になり得ぬ「ボイス」を挙げた理由は不明だが、彼はその挿画を模写したり、あるいは工夫を加えて物品を製作したりする程親しんでいた。なお他にも版画について述べた画法書もあるので、それらを見たかどうかは判らないが、それらや「ショメル」も含めて「ボイス」という名称で代表させたのではないかとも考えられる。

二　「解体新書」の原書供覧

大鳥蘭三郎

私の恩師藤浪剛一先生が昭和十七年十一月二十九日になくなられたあと私の教室へ御寄贈下さった「解体新書」の原書を供覧し、それに附して二、三の件を申し述べる。

周知のように「解体新書」の原書といわれているものはドイツの Johann Adam Kulmus が著わした解剖書をオランダ、ライデンの外科医 Gerardus Dicten が蘭訳した "Ontleedkundige Tafelen" と題する本である。そのタイトル・ページには次のように記されている。

ONTLEEDKUNDIGE
TAFELEN,
Benevens de daar toe behoorende
AFBEELDINGEN
EN
AANMERKINGEN,
Waar in het Zaamenstel des Menschelyken Lichaams,
en het gebruik van alle des zelfs Deelen
afgebeeld en geleerd word.
Door
JOHAN ADAM KULMUS,
Doctor en Hoogleeraar der Genees- en Natuurkunde in
de Schoolen te Dantzich, en Mede-Lid van de
Keizerlyke Academie der Weetenschappen.
In het Neederduitsch gebragt
Door

GERARDUS DICTEN,
Chirurgyn te Leyden
Te AMSTERDAM,
By de Janssoons van Waesberge.
MDCCXXXIV.

オランダ語訳本にはこのタイトル・ページの前にいわゆる絵扉頁がある。解剖室内に二人の人が立っており、そのうちの一人は解剖台上に横たわっている女の屍体に正に刀を下そうとしている図柄が画かれている。その下方にはいろいろな解剖道具が置かれている机があり、その横腹に

TABULAE
ANATOMIAE,
IO. AD. KULMI, Med. Doct,
et P.P.O. atq. A.N.C.S.

と四行に記されている。

なお下の欄外に Amstelodami Apud Janssonio-Waesbergios, 1731 と一行に記されている。オランダ語原本ではこれに続いて一七七三年十二月二十日の日付がある翻訳者の二つの序文があり、これに続いて日付のない原著者の序文が掲げてある

原書ではこれに続いて二十八の図譜の目次が載せてあり、それに次いでいよいよ本文が始まっている。第一表の本文だけをつぎに記すが、原書では本文よりも脚註がはるかに詳しく記載されている。

オランダ語訳本とならんでドイツ語原本、フランス語訳本、ラテン語訳本を供覧する。

終りにこれ等のクルムスの解剖書の外国語版と「解体新書」とを比較検討し、その体裁等についての異同のあらましを述べ、余裕があれば「解体新書」の翻訳の出来ばえを第一節について調べたところを発表する。

論文抄読

Gyula Regöly-Mérei;
Paläopathologische und epigraphische Angaben zur Frage der Pocken in Altägypten, Sudhoffs Archiv, Bd. 50, S. 411-417

従来、古代エジプトに天然痘が発生したと推測されてきたが、近年二、三の学者がこれを否定している。この論文ではその存否を古病理学的所見ならびに金石記録を検討して確認しようとしている。

古代医学では症状の記載が簡単であるために皮膚症状の記載だけを見て天然痘と断定できない。そこで著者は古代エジプトのパピルスに見られる皮膚症状の記載を比較検討してパピルスエーベルスに天然痘と推定される記載を見つけている。

古病理学的にはミイラの皮膚を調べた結果、第20王朝のものとラムス五世のミイラに天然痘の所見を認めた報告（M. A. Ruffer, 1910）を検討し、この二例の所見が確かである限り天然痘がエジプトに発生したことを否定できないという結論に達している。

（S・S抄）

第二十一回　国際医史学会に参加して

大矢　全節

イタリアのシェンナ市で九月二十二日から同二十八日まで、ローマ大学教授アダルベルト・パッチーニ博士の会頭の下で華々しく世界各地からの参加者を得て開かれた。

この学会での主要テーマは

(1) 中世期に於けるトスカナ医学の展望
(2) 中世期に於ける医学と芸術の歴史
(3) 歯科医学史
(4) 自由テーマ

であった。特にこの学会では中世期に於けるイタリアの医学について、これまで未発表の新しいすぐれた研究が発表され、興味をそゝった。それらのうちで印象の強かったのは、イタリアのコツルリの十三世紀のトスカナ医学史、同じくグアルニエリの十四世紀のトスカナの医学者ニコロ、ファルキュッチの生涯、イスラエルのコーペルマンの中世期に於ける美術、文学と医学との相互関係についてなどであった。

学会中にトスカナ地方に遺っている古墳及び出土品を集めた博物館の見学は非常に興味をひき、多くの収獲を収め得た。

なおローマ大学の医史博物館の見学はパッチーニ教授の熱意で完全に近い蒐集と設備を誇っていたことを教えてくれた。参加者一同に配布された同博物館の目録は多くの彩色図が挿入されていて豪華な医史学研究書にも勝る好い土産物であった。一九七〇年の第二十二回の同学会はルーマニアで開催されることに万場一致で決定した。

日本の医学史の研究は随分すぐれたものがあるが、これを欧文に翻訳して広く諸外国の学会に紹介する仕事に没頭したい希望を持って帰って来た。

書　評

日本法医学会総会50回の歩み

日本法医学会発行　新潟大学医学部法医学教室編　昭和43年刊

大正3年に創立した日本法医学会が昭和41年に第50回総会を迎え、これを記念して本書を刊行した。この本は5編からなり第一編は「日本法医学会の歩み」となっており、その年表にみる宿題報告の演題は法医学界の研究の発展を示し、同時に、この学問が社会と密接な関係があるだけに我々、専門外の者にもある種の感慨をもたらす。

第二編は第50回総会の記念行事の記録である。第三編の「各大学法医学教室、研究機関の略史」は夫々の教室、研究所の協力の下にまとめられたもので、各機関の歴史を知るのに便利である。

第四編の「日本法医学会物故会員名簿」はこの書の特色の一つでもあるが、逝去年月日を入れてあるので、歴史を調べる者には非常に有難い。

最后の第五編は「参考文献目録」であり、ここに法医学の歴史に関する文献で主要雑誌に掲載されたものが網羅されているが、一部片山国嘉のものや単行本の目録が他の書誌にまとめて掲載されているということで再録されなかったことは惜しまれる。いづれにしても、この書は日本法医学会の姿を知る上で貴重である。

（酒井シヅ）

日本医史学雑誌第十四巻総目録

原著

緒方洪庵の贈位とその前後　緒方富雄……一二三
緒方洪庵の贈位記念碑建設の前後　緒方富雄……一三一
大正三年の所謂「伝研移管問題」について—其の三—　安芸基雄……一四〇
嶺春泰伝　緒方富雄……二〇一
典薬諸家の概説　その一家福井家について　羽倉敬尚……二五〇
緒方洪庵墓の整理　緒方富雄……二七一
鷗外の史伝「渋江抽斎」の校勘記　松木明……二七五
「甲状腺」の語史学的考察　松木明知……二七九
石川大浪筆ヒポクラテス像の蘭文書き入れ　片桐一男……二八五

第69回日本医史学会総会

特別講演・日本検疫史　山下喜明……一
シンポジウム「北裏日本における種痘伝播について」
金沢地方における種痘伝播について　津田進三……三五
越後佐渡種痘史　蒲原宏……三八
秋田におけるロシア伝来の種痘法　吉成直太郎……四四
青森県における種痘伝播について　松木明知……四七
一般講演
衛生検査技師教育の史的観察　柴田幸雄……五一
わが国における血球計算法の使用について　会田恵……五二
徳島医学放射線文化史年表　今市正義……五五
古代医学史上の甲状腺腫　大塚恭男……五五
医学用語辞典の歴史　大矢全節……五八
再び「体系世界医学史について」　三木栄、阿知波五郎……六〇
アカクネヒトのパリ病院医学(一九四〜一八四八)　山城正之……六一
比較語学的方法による身体意識史検討の試み　三輪卓爾……六四
仏典にみられる社会政策　杉田暉道……六六
外国看護史書における本邦看護史に関する記述　長門谷洋治……六八
中国医学に関する医学全書　岡西為人……七〇
循環生理学の歴史　内山孝一……七三
備作医史補遺　中山沃……七七
タバコの功罪について　大槻盤水「薦録」を中心に　中沢修……八〇
加洲三世藤井方亭（方省）の主なる経歴について　藤井亭巳……八三
川柳等より見たる「腑分け」と「解剖」山本成之助……八四
清亮寺の解剖人墓について　松木明知……八九
三重県にある寛政一二年女屍解体図について　茅原弘……九〇
緒方洪庵の備前藩主診察と尺牘二通　中山沃……九一
杉田玄白著未刊随筆三種について　大鳥蘭三郎……九四
蘭学医学思想の受容と抵抗・河野省庵の「医則発揮」を中心として　阿知波五郎……九七
傍観機関における森鷗外　安芸基雄・藤村英子……一〇〇
別天氏と鷗外と（衛生学の医史学的試論）　丸山博・松田武……一〇三
日本医学史上の明治20年　宗田一……一〇四
医学の分科史をどう考えるか　中川米造……一〇七

良寛をめぐる医師達　藤井正宣……一〇九
新潟における外人宣教医　長門谷洋治……一一一
戊辰越後戦争と加賀藩　津田進三……一一二
越後に産れた仁医、尾台榕堂翁について　吉田一郎……一一五
新潟県北部の膏科民俗について　本間邦則……一一八
遁花秘訳（二種）と魯西亜牛痘全書と村山七郎
　訳ロシア原書の内容比較　小川鼎三・酒井シヅ……一一九

例会記事

横浜市立大学病院の沿革および看護業務の歴史的考察
　杉田暉道・野口美和子……一九〇
「伝研移管と森鷗外」　安芸基雄……一九〇
佐藤泰然と種痘　小川鼎三……一九一
「蘭館日誌」に見える西洋人科学者　大鳥蘭三郎……一九一
杉田玄白と直宿物語、フェイトなど　片桐一男……一九二
嬰児殺しに関する医史学的一考察　石山昱夫……一九二
故宮博物院の医学史料　石原明……一九三
江戸時代精神病治療史の梗概　山田光胤……一九四
明治百年漢方略史年表作成余話　矢数道明……二五八
「蘭館日誌」に見える日本人科学者—医学者を中心
　として—　大鳥蘭三郎……二五八
幕末における宮中の御出産について　石原明……二五九
忍性の医療社会事業　とくにその思想的背景について
　杉田暉道……二五九
近刊「解体新書」の自評　小川鼎三……二六〇
小川鼎三教授著「解体新書」についての感想　内山孝一……二六一
近代医家の位地　羽倉敬尚……二八八
日本医史学会の沿革について　小川鼎三・酒井シヅ……二八八
わが国へのナイチンゲールの紹介とその受容
　長門谷洋治……二八九
日本における医聖崇拝　緒方富雄……二八九
中国における水銀利尿剤の濫觴と神仙流医学　大塚恭男……二九〇
藤井方亭の生家をたづねて　藤井亭巳……二九一
我が国における初期歯科医師団体の成立並びにその
　発展過程　高木圭二郎……二九一
司馬江漢の銅版画技法の原典について　菅野陽……二九三
解体新書の原典供覧　大鳥蘭三郎……二九三

論文抄録

Gert Preiser : Zur Geschichte und Bildung der Termini Pharmakologie und Toxikologie, Medizinhist. Journal, 2, 124—134, 1967 (Y・O) ……一九五
Francisco Guerra : Juan de Valverde de Amusco. Clio Medica Vol. 2, pp. 339—362, 1967 (F・O生)……一九六
Sir Arther Salusbury MacNalty, K.C.B : The Prevention of smallpox: From Edward Jenner to Monekton Copeman. Medical History Vol. XII. pp. 1—18 1968 (S・S) …一九七
Eberhard Stubler : Die französische Revolution und die Medizin. Sudhoffs Archiv Bd. 37. pp. 131—139(S・S)二六二
Charles Coury ; Sir William Osler and French medicine, Medical History, Vol.XI. No.1 pp.1—14. 1967(大鳥蘭三郎)…二六四
P.E. Razzell ; EDWARD JENNER ; The History of a medi-

cal myth, Medical History, vol. 9 pp. 216—229. 1965 (S・O) 二六四
Joseph Needham ; Science and Society in East and West, Centaurus, Vol. 10, No. 3. pp. 174—197, 1964 (T・O) …二六五
Martin Schrenk ; Die Angina Pectoris, Sudhoffs Archiv, Bd. 51, H. 2, S. 165—183, 1967 (T・O) ……二六六
Gyula Regöly-Mérei : Paläopathologische und epigraphische Angaben zur Frage der Pocken in Altägypten, Sudhoffs Archiv, Bd. 50, s. 411—417, 1966 (S・S) ……二九四

書　評

寺院の過去帳からみた岩田県の飢饉　青木大輔著
酒井シヅ……一九六
小川鼎三著『解体新書—蘭学をおこした人々—』
片桐一男……二六三
日本法医学会総会50回の歩み　新潟大学医学部法医学教室編
酒井シヅ……二九五

雑　録

日本医史学会新潟地方会の創立……一九五
日本医史学会々則……一九八、二六八
『日本医史学雑誌』投稿規定……一九九、二六九
日本医史学会役員氏名……二〇〇、二七〇
「日本医史学雑誌」のバックナンバーについて
……二〇〇、二七〇
デ・ホウト二百年忌法要行なわる……二〇〇
中野操氏日医最高優功賞受賞……二六二
実験生理学の祖伏屋素狄の建碑　羽倉敬尚……二六七
賛助会員制度発足について……二七〇
第二十一回国際医史学会に参加して　大矢全節……二九五

昭和四三年度他誌所載医史学関係論文目録

医　譚

●南蛮医学栗崎流の一学系　安井広　第37号（昭和43年8月1日）
●適塾門下生林玄仲家譜　宮内孝夫　第37号（昭和43年8月1日）
●阿蘭陀商館ヘイトの死　片桐一男　第37号（昭和43年8月1日）
●広前藩医山上俊泰と「フサキ」　松木明知　第37号（昭和43年8月1日）

医学通信

●伊藤圭介翁伝落ち穂　吉川芳秋　第九〇二号（昭和43年1月24日）、第九〇四号（昭和43年2月21日）
●司馬凌海の著書「七新薬」の出版を援けた浜口梧陵　吉川芳秋　第九〇五号（昭和43年2月28日）
●シーボルト門下の平井海蔵　吉川芳秋　第九一六号（昭和43年6月19日）

医学のあゆみ

●日仏医学交流の側面　三浦義彰　第65巻第2号（昭和43年4

月13日）

●古典ギリシャにおける生化学思想　木村雄吉　第65巻第5号（昭和43年5月4日）

●古典ギリシャにおける生化学思想　一、イオニアの自然科学思想—原理と元素　木村雄吉　第65巻第9号（昭和43年6月1日）、第66巻第5号（昭和43年8月3日）

●古典ギリシャにおける生化学思想—二、南イタリアの自然科学思想　木村雄吉　第67巻第1号（昭和43年10月5日）、第67巻第10号（昭和43年12月7日）

漢方の臨床

●三焦について（1～4）、柴崎保三、第十五巻、第一～四号（昭和43年1月25日、同2月25日、同3月25日、同4月25日）

●漢方医学明治百年史（1～3）矢数道明、第十五巻、第三～五号（昭和43年3月25日、同4月25日、同5月25日）

●東西古代の本草書にみられる薬物の分類法について、大塚恭男、第十五巻、第四号（昭和43年4月25日）

●医家七部書について、岡西為人、第十五巻、第六号（昭和43年6月25日）

●明治百年漢方略史年表追記、矢数道明、第十五巻、第六号（昭和43年6月25日）

●恩賜神農像祭祀変遷年代表、矢数道明、第十五巻、第七号（昭和43年7月25日）

●前号「明治百年漢方医書及び雑誌出版の消長」追加訂正、矢数道明、第十五巻、第七号（昭和43年7月25日）

●明治以降漢方関係代表的雑誌一覧表について、矢数道明、第十五巻、第八号。（昭和43年8月25日）

●林静斉「経歴漫誌」抄〈深川晨堂氏資料より〉、矢数道明、第十五巻、第十号。（昭和43年10月25日）

医学史研究

●荒田川の汚濁に関する衛生学的研究　(1)荒田川汚濁史　竹内宏一　第27号（昭和43年2月15日）

●日本医史学史ノート(1)—山崎佐の役割を中心として—　宗田一　第27巻（昭和43年2月15日）

●「鷗外と医学」覚書・その3—鷗外と衛生学の書—　丸山博　第27号（昭和43年2月15日）

●明治初期の新潟県下における病院の発生とその社会的背景　蒲原宏　第28号（昭和43年5月20日）

●大阪大学と医学概論　沢潟久敬　第28号（昭和43年5月20日）

●医学史研究会第7回総会要望課題「病院史」総括　中川米造　第28号（昭和43年5月20日）

●明治中期の歯科診療録について歯科医学史的・社会学的検討　杉本茂春、大前義丈　第28号（昭和43年5月20日）

●日本における近代看護創生期の事情について　土曜会・歴史部会　第28号（昭和43年5月20日）

●森鷗外の「衛生学大意」について—〈鷗外医学〉覚書・その四—　丸山博　第28号（昭和43年5月20日）

●腸チフス予防接種と森鷗外　伊達一男　第28号（昭和43年5月20日）

●養護教諭の成立過程　「芽の会」・歴史班　第28号（昭和43年5月20日）

●医学教育論史・管見　中川米造　第29号（昭和43年11月10日）
●本邦女子医学教育史雑感　長門谷洋治　第29号（昭和43年11月10日）
●フランスの医育改革―「五月革命」以後　中川米造　第29号（昭和43年11月10日）
●医学教育変革の方向を求めて―名大医学部教育委員会の活動から―　山本宗平　第29号（昭和43年11月10日）
●金沢に於ける医学校と公立病院の分合　津田進三　第29号（昭和43年11月10日）
●異形式抜歯鉗子に関する知見補遺―その一　瘍科秘録の中の歯科記述について　杉本茂春　第29号（昭和43年11月20日）
●医療と薬物起源の一考察　宗田一　第29号（昭和43年11月10日）
●森鷗外と医学教育　伊達一男　第29号（昭和43年11月10日）
●准看護婦養成の歴史と問題点　小山仁示・志摩千代江　第29号（昭和43年11月10日）
●陸軍における衛生検査技術者　青山いわを　第29号（昭和43年11月10日）
●桜井女学校付属看護婦養成所創立者ツルとその教え子　土曜会・歴史部会　第29号（昭和43年11月10日）
●日本における労働衛生調査史　水野洋　第30号（昭和43年11月20日）
●衛生教育論のためのわが国の栄養問題の史的考察　藤森弘　第30号（昭和43年11月20日）
●戦前の私立精神病院長の日記から―精神科医斉藤茂吉の苦悩　岡田靖雄　第30号（昭和43年11月20日）
●佐藤信渕の乳児人工栄養説　碓井隆次　第30号（昭和43年11月20日）
●陸軍における看護婦の採用　青山いわを　第30号（昭和43年11月20日）
●小宮山新一先生の生涯　小浜泰子　第30号（昭和43年11月20日）

日本医事新報

●鷗外と「戦斗的啓蒙」についての疑問　伊達一男　第二二八二号（昭和43年1月20日）
●続・川柳より見たる明治時代の医療・衛生（伝染病篇）　第二二八二号（昭和43年1月20日）、第二二八三号（昭和43年1月27日）、第二二八四号（昭和43年2月3日）、第二二八五号（昭和43年2月10日）
●和蘭留学生―若き日の津田進三―　原三正　第二二八四号（昭和43年2月3日）、第二二八六号（昭和43年2月17日）、第二二八九号（昭和43年3月9日）、第二二九二号（昭和43年3月30日）、第二二九六号（昭和43年4月24日）第二二九九号（昭和43年5月18日）第二三〇二号（昭和43年6月8日）
●歴史としての日本医療のタプシタービダム　布施昌一　第二二八六号（昭和43年2月17日）、第二二八七号（昭和43年2月24日）、第二二八八号（昭和43年3月2日）、第二二八九号（昭和43年3月19日）、第二二九〇号（昭和43年3月16日）、第二二九一号（昭和43年3月23日）
●高松凌雲　青柳竜三　第二二九三号（昭和43年4月6日）
●良寛と原田鵲斎　藤井正宣　第二二九三号（昭和43年4月6

日)、第二二九四号　(昭和43年4月13日)

●紀の川の名医・華岡青洲　清水亮　第二二九八号(昭和43年5月11日)、第二二九九号(昭和43年5月18日)、第二三〇〇号(昭和43年5月25日)。

●ポンペとその門弟　青柳竜三　第二二九四号(昭和43年4月13日)

●緒方洪庵の師と門弟たち　青柳竜三　第二二九五号(昭和43年4月20日)

●「日本医学会論」補遺—「舞姫」との関係について—　伊達一男　第二二九七号(昭和43年5月4日)

●続・川柳より見たる明治時代の医療・衛生(医療篇)　山本成之助　第二二九八号(昭和43年5月11日)、第二二九九号(昭和43年5月18日)、第二三〇〇号(昭和43年5月25日)、第二三〇二号(昭和43年6月8日)、第二三〇三号(昭和43年6月15日)、第二三〇四号(昭和43年6月22日)

●医学的にみた「忠直卿行状記」—松平忠直の病跡—　王丸勇　第二三〇〇号(昭和43年5月25日)、第二三〇一号(昭和43年6月1日)

●良寛と原田正貞　藤井正宣　第二三〇七号(昭和43年7月13日)

●「和蘭留学生」追記　原三正　第二三〇八号(昭和43年7月20日)

●「医は仁術」とその現況に対する歴史学的な考察　布施昌一　第二三一六号(昭和43年9月14日)、第二三一七号(昭和43年9月21日)、第二三一八号(昭和43年9月28日)

●神々は去り医語は残った　竹村文祥　第二三一六号(昭和43年9月14日)、第二三一九号(昭和43年10月5日)、第二三二〇号(昭和43年10月12日)、第二三二一号(昭和43年10月19日)、第二三二二号(昭和43年10月26日)、第二三二三号(昭和43年11月2日)、

●シャーマニズムと医療　田村幸雄　第二三一九号(昭和43年10月5日)、第二三二二号(昭和43年20月26日)

●医学の明治百年(座談会)　佐々廉平、高橋明、小川鼎三、大鳥蘭三郎、笹本浩、石田正統　第二三二一号(昭和43年10月19日)

●続・川柳より見たる明治時代の医療・衛生(疾病篇)　山本正之助　第二三二一号(昭和43年10月19日)、第二三二五号(昭和43年11月16日)、第二三二六号(昭和43年11月23日)、第二三二七号(昭和43年11月30日)、第二三二八号(昭和43年12月7日)

●長崎におけるポンペ前後のオランダ医学　大滝紀雄　第二三二五号(昭和43年11月16日)、第二三二八号(昭和43年12月7日)

●良寛と桑原祐雪・祐順父子　藤井正宣　第二三二三号(昭和43年11月2日)

●明治百年に思う(1)　横山憲史　第二三三一号(昭和43年12月18日)

日本医事新報ジュニア版

●近世医学史から　大鳥蘭三郎　第69号(昭和43年1月15日)、第70号(昭和43年2月15日)、第71号(昭和43年3月15日)、第72号(昭和43年4月15日)、第73号(昭和43年6月15日)、第74号(昭和43年7月15日)、第75号(昭和43年9月15日)、第76号(昭和43年10月15日)、第77号(昭和43年11月15日)、第78号(昭和43年12月15日)

日本東洋医学会誌

●傷寒論の薬物の分量について　桑木崇秀、第十八巻、第四号（昭和43年3月30日）

●附子の医史学的考察（古代・中世）大塚恭男、第十九巻、第二号（昭和43年9月30日）

●附子の医史学的考察（近世以降）矢数圭堂、第十九巻、第二号（昭和43年9月30日）

日本病院協会雑誌

●岡山県病院史　第1編　中山沃　一五九号（昭和43年1月15日）

●岡山県病院略史　第2編　中山沃　一六〇号（昭和43年2月15日）

●岡山県病院略史　第3編　一六一号（昭和43年3月15日）

●岡山県病院略史　第4編　一六二号（昭和43年4月15日）

●明治時代の東京の病院　守屋弘　一六三号（昭和43年5月15日）

●聖ルカものがたり　平賀稔　一六四号（昭和43年6月15日）

●静岡市立静岡病院—その起源　大岡義秋一六八号（昭和43年10月15日）

●淀川キリスト教病院—その生いたちの近　藤利夫　一六九号（昭和43年11月15日）

薬史学雑誌

●薬品取締の変遷と薬学　清水藤太郎　第三巻、第一号（昭和43年9月10日）

●日本薬局方生薬の変遷　木村雄四郎　第三巻、第一号（昭和43年9月10日）

●わが国の薬学教育の変遷　宮島悦男　第三巻、第一号（昭和43年9月10日）

●薬学草創に寄与せる外人像　根本曽代子　第三巻、第一号（昭和43年9月10日）

●製薬事情の変遷　吉井千代田　第三巻、第一号（昭和43年9月10日）

蘭学資料研究会研究報告

●杉田玄白の女八百の系譜上の位置　緒方富雄　第二〇四号（昭和43年1月20日）

●「甲状腺」の語史学的考察　松木明知　第二〇五号（昭和43年2月17日）

●清亮寺の「解剖人墓」について　松木明知　第二〇七号（昭和43年4月20日）

●越前栗崎家について　竹内真一　第二〇八号（昭和43年5月25日）

●蘭学医学思想に及ぼした歌爾満・蒲爾花歌の影響　阿知波五郎　第二〇八号（昭和43年5月25日）

●江戸・宇田川家と京都・小石家の交渉　宗田一　第二〇八号（昭和43年5月25日）

●「蘭館日誌」に見える日本人科学者　大鳥蘭三郎　第二一〇号（昭和43年6月22日）

●加賀藩蘭学グループと壮猶館　津田進三　第二〇八号（昭和43年5月25日）

●河口家と阿蘭陀流外科（其2）杉田玄白家との関係等　（付）杉田信訳「解体図指説」　川島恂二　第二一一号（昭和43年7月

20日）

●大庭雪斉訳述考―「体液究理分離則」と「算学算法基原或問」　杉本勲　第二一一号（昭和43年7月20日）

●秋田種痘史に関する一史料―白鳥雄蔵の種痘法―　松木明知　第二一二号（昭和43年8月17日）

●戸塚家の家系　戸塚芳男　第二一三号（昭和43年9月21日）

●小関三英略伝　向井晃　第二一三号（昭和43年9月21日）

●泰平年表と嘉永明治年間録　神田茂　第二一〇号（昭和43年6月22日）

●室蘭地方の医学史―御用医師野村周雨のことなど　松木明知　第二一五号（昭和43年11月16日）

●中川五郎治の系譜―追補―　松木明知　第二一六号（昭和43年12月21日）

労働科学

●当研究所に所蔵するゲッチンゲン医書文庫について（その10）　高木和男　第44巻第9号（昭和43年9月10日）

正誤　**緒方「嶺春泰伝」**（第十四巻第三号　昭和四十三年十一月発行）

頁	行	正	誤
二〇六	系図	勅使河原養子→勅使河原弼・養子	
二一六	八	快無座→快無御座	
二一六	一一	儀・手振候付→手振候付	
二一七	七	御師相勤→御医師相勤	
二一八	九	永遺爾口→永遺爾類	
二一〇	一〇	牛山治套→牛山活・套	
二一六	五	M··Suntaij→M: Suntaij	
二一八	五	M··Suntaij→M: Suntaij	
二三一	上段最後から六	leern→leeren	
二三一	上段最後から三	vader land→vaderland	
二三一	上段最後	in→is	
二三二	上段一	in→is	
二三二	上段四	bouen→boven	
二三二	一二	genoemdl→genoemd	
二三二	一三	s uavonds→savonds	
二三二	一五	zierte→ziekte	
二三二	一九	uwEdele→uwelEdele	
二三三	一	ot→tot	
二三二	一二	bouen→boven	
二三二	一三	e→te	
二三四	八	知レ律ヲ→知レ律ヲ	
二三四	九	之且メ→之ヲ且メ	
二三四	一〇	吾非メ→吾非メ	
二三五	五	網・領→綱・領	
二三七	一	仍経件（シンケン）→仍経件（シンキンケン）	
二三八	一一	故医術→故医衡	
二三九	一一	油にて→油にて製・タル	
二四二	一二	蘭事本始→蘭・学・事始	
二四六	一二	昭和四十年→昭和四十・二年	

頁	行	誤	正
9	田中氏㈠系図	（小野崎氏に嫁す）	（老女小野崎）
10	9		（あとにつづけて）遊は姫の入輿にしたがって、藩侯池田氏に仕え、老女小野崎といった。
10	最終行	トシについては不明	トシは石川氏にとついだ。
11	田中氏㈡系図	トシ タツ トヨ ＝通敏 孝子	石川氏 ＝ トシ 福田久道┬久誠 ＝┬宵雄 タツ└万亀雄 三原直亮 ＝ トヨ（養女） 通敏 ＝┬敏 孝子
12	7	トヨのことがつまびらかでない。	トヨ（養女）は三原氏にとついだ。
14	土方氏系図	（村上氏） 梅弥（入夫） ＝ 政子 河村政春	（村上氏） 梅弥┬澄 ＝┬英男 政子└不二男 河村政（クグシ）
16	終から2	長女遊（ゆう）は小野崎氏の妻となり、	長女遊は老女小野崎として藩侯池田氏に仕え、

日本医史学会々則

第一条　本会は日本医史学会と称する。

第二条　本会は医史を研究しその普及をはかることを目的とする。

第三条　本会は前条の目的を達成するため、次の事業を行なう。

一、年一回、総会を開く。

二、本会の機関誌として『日本医史学雑誌』を発行し、これを会員にわかつ。

三、随時、地方会、例会を開き、研究発表、展観などを行なう。

四、日本の医史学を代表して内外関係学術団体との連絡協力をはかる。

五、その他の事業。

第四条　本会の主旨に賛成しその目的達成に協力しようとするものは、理事または評議員の紹介を経て会員となることができる。

第五条　会員は会費とすて年額一五〇〇円を前納する。ただし外国に居住する会員は年額一〇ドルとする。会員は研究発表および本会の事業に参加することができる。

本会に名誉会員と賛助（維持）会員をおくことができる。名誉会員は本会の事業に多大の貢献した者を評議員会の議をへて推せんする。賛助会員は本会の趣旨に賛同し、年額一万円以上を収める者とし評議員会の議をへて推せんする。

第六条　本会に次の役員をおく。

一、役員は理事長、会長、評議員、幹事とする。

二、理事長は一名とし理事会で互選し本学会を代表する。

三、会長は年一回の総会を主催し、その任期は総会終了の日までとする。

会長は理事会の推せんにより理事長が委嘱する。

四、理事および評議員はそれぞれ若干名とし理事会および評議員会は本会の重要な事項を議決する。

評議員は普通会員の中より、理事会および総会の議を経て理事長が推せんする。

理事は評議員の中より評議員会の推せんにより

理事長が委嘱する。

五、本会の実務を処理するため、常任理事二名、幹事若干名をおく。常任理事は理事より、幹事は会員より理事長が任命する。

六、役員の任期は二年とし重任を妨げない。（ただし会長を除く）

以上の役員は総会の承認を得るものとする。

第七条　本会の事務所は順天堂大学医学部医史学教授室内（東京都文京区本郷二の一）に置く。

第八条　本会は理事長の承認により支部または地方会を設けることができる。

第九条　会則の変更は総会の承諾を要する。

『日本医史学雑誌』投稿規定

発行期日　年四回（一月、四月、七月、十月末日）とする。締切は発行月の二か月前とする

投稿資格　原則として本会々員に限る。

原稿形式　原稿は他雑誌に未発表のものに限る。和文の表題、著者名のつぎに英文表題、ローマ字著者名を記し、本文の終りに英文抄録を添えること。

原稿枚数　原稿は二百字または四百字詰原稿用紙に縦書きのこと。

原稿の取捨選択、掲載順序は編集委員が行なう。また編集の都合により加除補正することもある。

表題、著者名、本文（表、図版等を除く）で三印刷ページ（四百字原稿用紙で大体七枚）までは無料とし、それを越えた分は一印刷ページあたり二〇〇〇円を著者の負担とする。

校　正　原著については初校を著者校正とし、二校以後は編集部にて行なう。

別　刷　投稿者には論文掲載紙を五部無料贈呈する。別刷希望者には五十部単位で実費にて作成する。

原稿送り先　東京都文京区本郷二丁目一の一　順天堂大学医学部医史学教授室内　日本医史学会

編集委員　大鳥蘭三郎（委員長）　石原明　杉田暉道　大塚恭男　酒井シヅ

日本医史学会役員氏名（五十音順）

理事長　小川　鼎三
会　長　鈴木　勝
副会長　今田　見信
常任理事　石原　明　大鳥蘭三郎
理　事
安西　安周　赤松　金芳　阿知波五郎
今田　見信　石川　光昭　内山　孝一
梅沢彦太郎　大久保利謙　大塚　敬節
大矢　全節　緒方　富雄　岡西　為人
蒲原　宏　佐藤　美実　杉　靖三郎
鈴木　正夫　鈴木　勝　宗田　一
竹内　薫兵　津崎　孝道　戸苅近太郎
中野　操　平塚　俊亮　三木　栄
矢数　道明　吉岡　博人　和田　正系
評議員
安芸　基雄　石田　憲吾　今市　正義
岩治　勇一　王丸　勇　大塚　恭男
金城　清松　久志木常孝　鮫島　近二
清水藤太郎　杉田　暉道　高山　担三
田中　助一　津田　進三　中泉　行正
中沢　修　中山　沃　長門谷洋治
服部　敏良　福島　義一　藤野恒三郎
丸山　博　松木　明知　三浦　豊彦
三廼　俊一　山形　敞一　山田　平太
幹　事
大塚　恭男　酒井　シヅ　杉田　暉道
谷津　三雄

「日本医史学雑誌」のバックナンバーについて

日本医史学雑誌五巻一号（復刊一号）―昭和二九年―から十三巻四号―昭和四二年―までのバックナンバー揃いを一万三千五百円、一巻を千五百円、一号を四百円の会員価格で頒布しています。御希望の方は日本医史学会事務所宛に申込み下さい。

賛助会制度の発足について

今年の医史学会総会での決定に従って、賛助会員の制度を漸く具体化いたしまして、本会の趣旨に御賛同頂いた次のいくつかの会社に早速会員になって頂きました。

日本医事新報社、医歯薬出版株式会社、金原出版株式会社、医学書院、平凡社、国際書房、武田薬工、藤沢薬工、エーザイ、日本C・H・ベーリンガー・ゾーンの各株式会社（順不同）

編集後記

予定より大分おくれてしまいましたが、第十四巻四号をおおくりします。年間四回発行という原則をまがりなりにもはたしたことになりますが、今年度はより円滑に雑誌が発行できるようにと願っております。

よい雑誌を、定時に発行するためには、何よりも会員の皆さまに、より積極的に原著を寄せて頂かねばなりません。今年度も一層の御協力をお願いいたします。（Y・O）

昭和四十三年十二月二十五日　印刷
昭和四十三年十二月三十日　発行
日本医史学雑誌
第十四巻　第四号
編集者代表　大鳥蘭三郎
発行者　小川鼎三
印刷者　柏原義治
発行所　日本医史学会
東京都文京区本郷一ノ一
順天堂大学医学部医史学教室内
郵便番号一一三番
振替東京一五二五〇番

各科領域で汎用される
C.H.ベーリンガーゾーン社製品

鎮痙剤、胃・十二指腸潰瘍治療剤	ブスコパン®
鎮痙・鎮痛剤	複合ブスコパン®
高血圧治療剤	カンヒドニウムR-S®
利尿降圧剤	バルミラン®
冠循環増強剤	ペルサンチン®
冠循環増強・鎮静剤	セダペルサンチン®
循環増強剤	エホチール®
脳・末梢循環障害治療剤	バスクラート®
喘息治療・気管支拡張剤	アロテック®
気道粘液溶解剤	ビソルボン®
緩下剤	ラキソナリン®
痔疾治療剤	ルブリテックス®
外用充血剤	ヒナルゴン

日本C.H.ベーリンガーゾーン株式会社
大阪市東区道修町3丁目21番地

販売元 田辺製薬株式会社
大阪市東区道修町 支店 東京・福岡・札幌・名古屋

A5 4303

朝夕一杯！　中将湯が

貴方の健康をととのえます

婦人良薬

中将湯

頭痛・肩こり・冷え
生理痛・生理不順
めまい・産前産後
更年期障害に

150円・300円

17種の薬草を一錠に

中将湯の錠剤

ラムール

200円・500円・1000円

TSUMURA

株式会社津村順天堂
東京都中央区日本橋通３～８

NIHON ISHIGAKU ZASSHI

Journal of the
Japanese Society of Medical History

Vol. 14. No.4 Dec. 1968

CONTENTS

Original articles

The Rearrangement of Koan Ogata's Tomb
.....Tomio Ogata.....(1)

A Note on Ogai's "Tyusai Shibue"
.....Akira Matsuki .....(5)

An Ethymological Study on the Thyroid Gland
"Kojo-sen".....Akitomo Matsuki .....(9)

On the Caption on the Portrait of Hippocrates
by Tairo Ishikawa.....Kazuo Katagiri .....(15)

Notes from monthly meetings.....(18)

Miscellaneous .....(25)

The Japanese Society of Medical History
c/o Department of Medical History
Juntendo University, School of Medicine
Hongo 2~1, Bunkyo-ku, Tokyo